公益財団法人
# 住友財団ニュース

第5号
2019年11月

Sumitomo Foundation News　Vol.5

## プログラムの底流に流れるもの

「アジア諸国における日本関連研究助成」プログラムは、日本に対する深く正しい理解を促進するため、アジアの研究者による日本に関連する研究を支援することで、アジア諸国との相互理解、相互信頼関係を構築し、アジアひいては世界の平和に寄与したいとの狙いがあります。

しかし背景には、先の大戦において日本が孤立化し独善に陥ったことで、人類を不幸な戦争へと巻き込んだことへの深い反省が込められています。

**【台湾の日本研究センター】**

台湾からは毎年、質の高い研究テーマの応募が多数あり、日本関連研究をサポートし紐帯を深めるために、財団は毎年積極的に大学・研究機関等を訪問しています。

ところで台湾では、2009年頃から歴史を正しく理解し日本と幅広く啓発し合える関係を再構築するため、大学、大学院を中心に「日本研究センター」を設立する動きが始まっています。

これは半世紀に及ぶ日本統治下（1895年～1945年）で、日本を深く理解していた知識人が現役をリタイヤする一方、政治・経済の分野で中核を占める層に欧米留学組が増えてきたこと、若い世代はアニメやコスプレなど日本のポップカルチャーに関心は高いものの、日本の理解が表層的に留まっていることなどへの危機感の表れでもあります。

＜台湾大学の日本研究センター＞

設置されたセンターの数は、12の大学に及んでいますが、こうしたセンターの財政的基盤は十分でなく、活動の活発な大学を中心にセンターを統合し、積極的に台湾・日本企業から資金面等の支援を得ようとの動きもあります。

アジア各国は政治・経済・文化の発展とともに高齢化や格差問題、価値観の多様化による社会の不安要因をも抱えるようになっています。これからは、アジア各国のこうした変化にもきめ細かく対応し、「助成」という資金面の活動にとどまらず、プログラムが真に狙いとするものを実現するための様々な役割が財団には求められています。

| 主な活動内容（2019年8月～11月）＊（詳細紹介） | | |
|---|---|---|
| ＊ | 1. | 8月～10月アジア諸国における日本関連研究助成関連出張<br>（フィリピン・タイ・インドネシア・台湾・韓国・モンゴル） |
| ＊ | 2. | 9月　「文化財よ、永遠に」オープニングセレモニー／展覧会　開催 |
| | 3. | 10月　2019年度基礎科学研究助成・環境研究助成採択者決定 |
| | 4. | 10月　第45回理事会　開催 |
| | 5. | 9月～10月　アジア諸国における日本関連研究助成募集（応募：548件） |
| ＊ | 6. | 10月　海外文化財関連欧州出張 |

Copy Right © The Sumitomo Foundation.　All Right Reserved

# 住友財団修復助成30年記念「文化財よ、永遠に」

９月９日、展覧会「文化財よ、永遠に」のオープニングセレモニーが住友会館で開催されました。当日は、台風15号が接近し開催が危ぶまれましたが、セレモニー開始前に天候は回復し、ご来賓ならびにご招待者を合わせ約200名にご出席いただき、無事開催することができました。

**【特色ある展覧会を】**

展覧会は、「全国４会場同時期開催」という前例のない方式で実施しました。巡回展形式ではなく各館がそれぞれの地域の特色ある文化財を展示し、展示スタイルや会場レイアウトにも各館のオリジナリティが活かされました。

「文化財修復の意義・重要性」を多くの方に伝えたい、とのコンセプトに沿って、ビデオ放映、写真やフロー図、実演や修復の材料・道具等実物の展示による解説など、修復過程や修復技術の真髄を伝える工夫がなされ、展示プレートや図録には修復業者名を記載するなど、過去に例のない取り組みも行われました。

「修復を分かりやすく伝えたい」との思いからは、修復過程のビデオを新たに制作したり、座談会を開いたほか、ワークショップやバックヤードツアー（修復現場の見学会）、シンポジウム・講演会・ギャラリートークなど来館者との接点を増やすイベント的な取り組みにも力が注がれました。とりわけこの分野の第一人者を集めた東京国立博物館のシンポジウムは定員の約1.5倍の応募があり、時宜を得たテーマと講演内容のクオリティの高さが評価され好評でした。

今回の企画は、住友グループ各社の深いご理解と全面的なご支援のもと実現したものであり、グループの社会貢献活動を担う存在としての住友財団の使命とその重要性を職員一同改めて認識する機会ともなりました。

これからも「人類の課題解決に資する」とともに「よりよい社会の実現に寄与する」という財団の定款の趣旨・設立の目的にかなう価値ある助成と活動を続けてまいりたいと思います。

＜展覧会図録（共通）＞

**【オープニングセレモニーと各館展示】**

＜開会＞

＜講演　今津節生奈良大学教授＞

＜来賓ご挨拶　宮田亮平文化庁長官＞

＜泉屋博古館本館　京都＞

＜泉屋博古館分館　東京＞

＜九州国立博物館　福岡＞

＜東京国立博物館　東京＞

展覧会は、9月6日泉屋博古館本館を皮切りに、4会場で順次開催しました。

通常の展覧会の２倍近い入場者のあった会場もあり、来館者の反応はいずれも大変好意的なものでした。

会期は12月1日の東京国立博物館の終了をもって全期間を終えることとなりました。

# 海外文化財維持･修復事業助成

## *欧州出張（2019年10月21日～26日）*

海外文化財の修復助成プログラムでは、過去財団の助成により修復を終えた美術品の現地確認、海外の美術館・修復所等との情報交換、さらに住友財団や助成プログラムの活動紹介並びにアウトリーチ活動（普及・広報）のために欧米各国を訪問しています。

本年は欧州の一部の主要美術館のほか、日本美術の専門的な研究機関を訪問し、修復された文化財の現況確認や現地の学芸員・修復担当者に所蔵日本美術品の内容や現況、修復ニーズの有無等についてヒヤリングすると共に、館内や収蔵庫・修復現場を視察しました。

今回の訪問先は、以下の４ヵ所（訪問順）です。

**【アジア美術館（ドイツ・ベルリン）】**

ベルリン国立博物館群のひとつで、日本・中国の美術品を中心に所蔵しています。
しかし大半は第２次世界大戦後に収集したもので、戦前に収集されたものは戦災やソ連による国外持出によりほとんどが失われました。国外に持ち出されたものは、ロシアのエルミタージュ美術館に収蔵されているといわれますが、大半の美術品は返還されていないとのことでした。

**【大英博物館（イギリス・ロンドン）】**

言うまでもなく、古今東西の文化財を所蔵する世界最大級の博物館のひとつで、年間来館者数は600万人以上（因みに、ルーブル、メトロポリタンは700万人以上）です。

右の写真は、1949年（昭和24年）火災により焼失した法隆寺金堂壁画の模写（伝桜井香雲筆）です。訪問時開催中の奈良県・大英博物館主催の特別展に展示されていました。これはOXFORDに留学しておられた三笠宮彬子女王殿下が、当時研究のために大英博物館で調査中に偶然発見された貴重なものです（参考：彬子女王著「赤と青のガウン」）。

大英博物館 特別展「奈良－日本の信仰と美のはじまり」展に展示された「法隆寺金堂壁画模写（第９号壁）」

**【センズベリー日本芸術研究所（イギリス・ノリッジ）】**

日本の芸術・文化への理解と普及を目的に、1999年設立された研究機関で、英国内の日本美術の情報ネットワーク拠点として重要な機関です。

**【チェスター・ビーティ図書館（アイルランド・ダブリン）】**

1956年に実業家チェスター・ビーティ卿の遺品をもとに設立された図書館。日本の優れた奈良絵本・絵巻を多く所蔵しています。

ダブリン城内にあるチェスター・ビーティ図書館

センズベリー日本芸術研究所の
建物の前にて研究所の皆様と

今回の訪欧では、イギリスにおける日本文化・芸術の主要な研究拠点のひとつであるセンズベリー日本芸術研究所を訪問しました。

同研究所は、国際的なネットワークを有し、特に大英博物館、イーストアングリア大学（University of East Anglia）、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（ＳＯＡＳ：the School of Oriental and African Studies）と密接な関係を持ちながら活動しています。

今後、同研究所を通じてイギリスを中心とするヨーロッパの美術館・博物館・大学図書館等の日本美術品の保有状況や修復ニーズの情報を入手できることや様々な人脈の拡大が期待できます。

## アジア諸国における日本関連研究助成

### *海外出張*

**【インドネシア出張】**

インドネシアは人口約2.6億人で中国、インド、アメリカに次いで人口が多い国です。
日本とインドネシアは2018年に国交樹立60周年を迎え、日本製品・技術に対する信頼に加え、近年アニメ・J-POPなど日本のコンテンツ等への人気の高まりから、親日派が増えています。また日本語学習者は初等・中等教育を中心に70万人を超え、世界では中国に次ぐ規模です。

首都ジャカルタのあるジャワ島だけでなく、各島の高等教育機関の研究者にも日本研究者がいることから、今年度はバリ島（ウダヤナ大学）、スラウェシ島（ハサヌディン大学）、スマトラ島（北スマトラ大学、アサハン大学）の主要大学を訪問しました。インドネシアの今年度の応募が前年比約40件増の約100件と急増したのはこうした背景もあります。

インドネシア出張に際しては、ＮＥＣの現地法人に各種サポートや現地での緊急時の対応等で全面的にご支援・ご協力をいただいています。

**【モンゴル出張】**

モンゴルの人口は約320万人（静岡県：約370万人）ですが、国土は日本の約4倍です。1990年代初頭の民主化・市場経済化の過程で、日本は積極的な支援を行い、以後一貫してＯＤＡによる支援を継続していることや、モンゴル出身の力士が日本で活躍していること等もあって、今日では大変親日的な国です。

今回、2008年以来11年ぶりにモンゴルを訪問し、同国における過去の助成対象者と面談しプログラムへの要望や意見などをヒアリングするとともに、過去の助成対象者間のネットワーク構築を提案しました。

この他、住友財団では2011年～2012年にかけて、首都ウランバートルから西300㎞に位置する「カラコルム博物館」の所蔵文化財に対し、修復助成を行っています。

＜スラウェシ島のハサヌディン大学＞

## その他助成

### *東日本大震災被災者･復興支援活動*

公募助成を主体とする住友財団のプログラムの中に、非公募で助成している案件があります。
その一つに、特定非営利活動法人難民を助ける会（AAR Japan）が行っている、東日本大震災被災者・復興支援活動があります。

難民を助ける会は、震災発生直後から、被災各地で各種緊急支援ならびに復興支援活動を行っています。その中に、高濃度の放射線被害により、屋外活動が制限され、運動不足による健康への悪影響や精神的ストレスにさらされている相馬市など福島県浜通りの幼児・児童並びにその家族を対象に、県内で開催している交流イベントがあります。イベントは参加者の増加とともに規模が拡大し、地元のボランティアや市町村や教育機関とも連携した大きなプロジェクトへと発展しています。

＜交流イベント参加者＞

今回のプログラムでは、相馬市の障がい者福祉作業所「工房もくもく」の所長から、当日の交流花壇への花植えで使うひまわりの種を提供していただきました。

「工房もくもく」は、2011年の震災で被災した人たちを支援するため、全国の支援者にひまわりの種を入れたバッジを配りました。

この活動に住友ゴム工業株式会社の宮崎工場が感銘を受け、工場内や従業員の家庭等で育てたひまわりから採れた種を福島に送り届ける等の支援をしているとのことです。

住友ゴム工業の社会貢献活動が様々な形で拡がり、大きな絆へと育っているのです。

＜交流花壇＞

〒105-0012　東京都港区芝大門1-12-16（住友芝大門ビル2号館）
TEL: 03-5473-0161　FAX:　03-5473-8471
E-mail: sumitomo-found@msj.biglobe.ne.jp
URL: http://www.sumitomo.or.jp/